

# AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2003.12) 4巻1号:30-37.

初産婦の不安及び気分の変化とYG性格類型との関連

竹明美, 末原紀美代

依頼論文 (原著)

## 初産婦の不安および気分の変化と YG 性格類型との関連

竹 明 美\* 末 原 紀美代\*\*

### 【要 旨】

女性は、妊娠分娩によって、短期間のうちに身体の生理的变化に加え、家族的役割の変容や生活習慣の変更を余儀なくされる。特に初産婦は、未知の体験に多くの不安や気分の変化を経験する。体験に対する反応は、個人のパーソナリティに委ねられるところが大きい。今回初産婦に焦点をあて、性格特性測定のひとつである YG 性格検査を用いて性格特性を分類し、性格類型による不安・気分の変化の相違について検討した。対象者は、A 類 (3 名)、B 類 (5 名)、C 類 (3 名)、D 類 (10 名) に分類された。不安は STAI、気分は POMS を用いて調査した結果、以下の事が明らかになった。

- ① 不安や気分の変化は、YG 性格検査による性格類型によって違いがあった。
- ② 特性不安は、B 類が最も高く次いで A・C 類、D 類の順であり、各類型で産褥期に比べ妊娠期の高い傾向を示した。
- ③ 性格類型のうち、B 類は不安やネガティブな気分を訴えやすい。
- ④ B 類は、未来即ち予期的不安よりも現在遭遇している事象に不安を感じやすい傾向にある。

以上のことをふまえて、医療者はその人の性格傾向を把握し、関わり方・指導のあり方を検討していかなければならない。

**キーワード** 初産婦、YG 性格検査、不安、気分、周産期

### I. 緒言

女性にとって妊娠分娩は、短期間のうちにホルモンの変動や身体の生理的变化と、家族的役割の変容や生活習慣の変更をもたらす。妊娠が成立するとホルモン分泌は変化し、つわり症状など非妊娠時とは異なる身体状況になる。

新道<sup>1)</sup>は、「妊婦は妊娠の自覚によって喜びを主とする肯定的な感情を示すが、いっぽうでは、『果たして今、自分は良い母親になれるのだろうか』という不安や当惑をも覚える」と述べており、特に初産婦は、母親という新たな役割獲得に伴う、様々な心理状況をも体験することになる。また、妊娠経過が進むと胎児

の成長に伴う子宮の増大や皮下脂肪厚の変化などによって、腰痛や下肢の痙攣、浮腫などのこれまで経験のない身体症状の出現や分娩に対する不安が生じてくる。

こうした心身の状態や変化は、ストレスナーとなって様々な心理状況や対処行動を引き起こす。

このストレス反応性は、個人を取り巻く外的環境にも影響されるが、内的環境としての個人のパーソナリティに委ねられるところが大きい。したがって、妊娠すれば誰もが体験する数多くの共通した事象によって生じる不安や気分の変化は、パーソナリティに大きく影響される。性格特性による妊婦の不安は、喜多<sup>2)</sup>や岩谷<sup>3)</sup>らや岩田<sup>4)</sup>の報告がある。しかし、性格特性に

\* 旭川医科大学医学部看護学科

\*\*大阪府立看護大学看護学部看護学科

よる妊産婦の不安や気分に関する経時的報告はほとんど見当たらない。

本稿では、初産婦に焦点をあて、性格特性測定のひとつである YG 性格検査を用いて性格特性を分類し、性格類型による不安・気分の変化の相違について検討した。

## II. 研究方法

### 1. 研究対象

対象：大阪府下にある約300床の某公立病院（年間分娩件数約800件）に通院する平成13年9月～10月の間に予定日を控えた初妊婦である。本研究に関する趣旨を理解した上で研究への参加に同意した初産婦のうち、妊娠26～32週（以下文中は妊娠7・8ヵ月、グラフ上はss7・8Mと表す）、妊娠36または37週（以下文中は妊娠10ヵ月、グラフ上はss10Mと表す）、分娩後24時間（グラフ上は産後24h）、産褥4日（グラフ上は産褥4d）、産褥1か月（グラフ上は産褥1M）における縦断的調査が可能であった21名を分析対象とした。倫理的配慮：研究同意に関する自由意志の尊重、研究不参加および中断による不利益を受ける事のないこと、匿名性の保証について説明を行い、研究への参加を求めた。調査は、毎回協力者の意志や負担感を確認し倫理的配慮に留意した。なお、本研究の倫理的問題に対して大阪府立看護大学の倫理委員会において審査を受け、委員会より承認を得た。

### 2. 調査内容

基本属性は、外来診療録および入院診療録から年齢、既往妊娠歴、既往歴、夫の年齢、就業の有無、家族形態、分娩状況、産褥経過の情報を収集した。

性格特性は、YG 性格検査（矢田部ギルフォード性格検査）によって性格傾向の分類を行った。YG 性格検査は、12尺度に対して各10問の質問項目を配した120問からなり、「はい」「いいえ」「どちらでもない・わからない」の回答による質問紙形式の性格検査である<sup>5)</sup>。

不安および気分に関する調査は、関学版 STAI (State-Trait Anxiety Inventory) と POMS (Profile of Mood States) を用いた。

STAI は、Spielberger, C.D によって開発された質問紙による不安尺度であり、岸本、寺崎、新浜によっ

て日本版に作製されたものである<sup>6)</sup>。STAI は、状態不安尺度と特性不安尺度の2種（前者：STAI form X-I, 後者：STAI form X-II）の質問紙で構成され、それぞれ異なった質問20項目からなる。各項目に対して4段階（1-4点）で回答する。状態不安とは、個人がその時おかれた生活体条件により変化する一時的な情緒状態であり、特性不安とは不安状態の経験に対する個人の反応傾向を反映するものであり、比較的安定した個人の性格傾向を示す。

POMS は、McNair らによって開発された質問紙による気分尺度であり、横山と荒記<sup>7)</sup>によって日本版に翻訳されたものである。POMS は、6の特性とダミーを含む計65項目の質問からなり、各質問項目に対して「まったくなかった」「少しあった」「まあまああった」「かなりあった」「非常に多くあった」の5段階（0-4点）で回答する。得点の高いほど、その特性状態が強いことを意味している。

また、STAI の状態不安尺度を用いて、妊娠37週時に分娩時を想像した時に感じる不安と産褥4日に退院後の生活について想像した時に感じる不安を併せて調査した。

### 3. 分析方法

検定は SPSS PC10.0J のノンパラメトリック検定を用いた。POMS・STAI の経時的変化は Wilcoxon の符号付き順位検定を行い、群間の差は、Mann-Whitney の U 検定を行った。

## III. 結果

### 1. YG 性格検査による分類

表1に YG 性格検査の結果を示す。性格特性の分類は、情緒的に安定し、社会適応もよく活動的である安定積極型のD類が10名（47.6%）と最も多く、性格特性について平均的な状態を示す平均型のA類は3名（14.3%）、外向的ではあるが社会不適応性・情緒不安定である不安定積極型のB類は5名（23.8%）、情緒の安定性はあるが非活動性で内向的な安定消極型の

表1 YG 性格検査による分類

	n	%
A	3	14.3
B	5	23.8
C	3	14.3
D	10	47.6

C型は3名(14.3%)であった。情緒不安定・非活動性で内向的な不安定消極型のE類に該当するものはいなかった。

2. 対象者の属性

対象者は、年齢 $27.7 \pm 3.41$ 才であった。家族形態は、3名を除いてすべて、夫と2人暮らしの核家族であった。就業状況は、5名が産休中、その他の対象者は、結婚後退職、あるいは今回の妊娠を契機に退職していた。分娩時の週数は40週1日で、入院理由は、陣痛発来：11名、破水：5名、予定入院(予定日超過のため陣痛誘発)：5名であった。分娩様式は正常分娩13名、クリステレル4名、クリステレル&吸引分娩4名であった。母乳栄養確立状況は、退院時において、母乳のみ12名、混合栄養9名、1ヶ月健診時において、母

乳のみ10名、混合栄養11名であった。表2にYG別対象者の属性を示す。

3. YG別STAIの変化

図1、図2にYG別STAIの経時的变化を示す。状態不安・特性不安は、いずれの時期においても、YG性格分類の類間に有意差は認められなかった。しかし、状態不安において、B類は他の類に比べいずれの時期においても高い値で経過し、産褥4日に最高値を示していた(図1)。特性不安においても、B類は他の類に比べ産褥1ヶ月を除いては、各時期において高い値で経過し、妊娠10ヶ月に最高値を示していた。A類では、他の類の経時的变化とは異なり、妊娠中よりも産褥1ヶ月において最も高い値を示した。類内の経時的变化では、特性不安において、D類の妊娠10ヶ月から

表2 YG別対象者の属性

		A	B	C	D
年齢		26.7 ± 5.03 歳	26.6 ± 1.82 歳	29.0 ± 1.0 歳	28.2 ± 4.08 歳
家族形態	夫のみ	3名	5名	1名	9名
	複合家族	—	—	2	1
就業状況	産休中	1	—	—	4
	主婦	2	5	3	6
分娩時週数		39週6日	39週3日	39週6日	40週1日
入院理由	陣痛発来	1	4	1	5
	破水	1	1	2	1
	予定入院	1	—	—	4
分娩様式	正常分娩	3	2	1	7
	クリステレル	—	2	1	1
	吸引分娩	—	1	1	2
退院時母乳栄養	母乳のみ	1	2	3	6
	混合栄養	2	3	—	4
1か月時母乳栄養	母乳のみ	—	3	3	6
	混合栄養	3	2	—	4

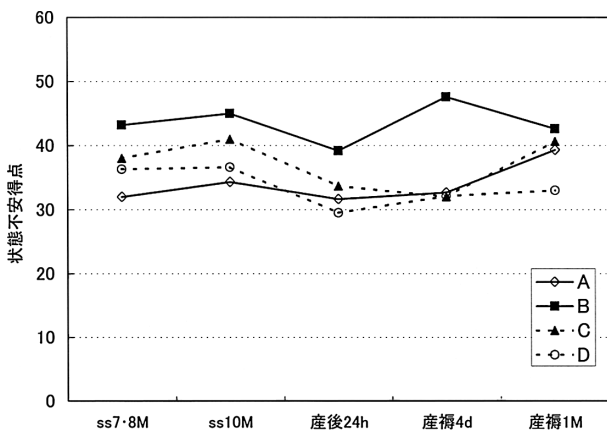


図1 YG別状態不安

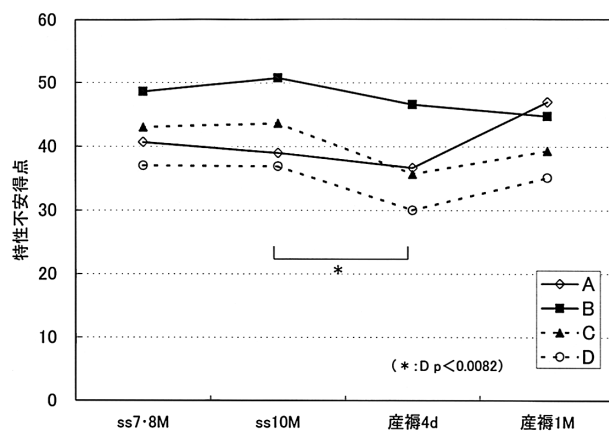


図2 YG別特性不安

産褥4日では有意に減少していた(図2)。

#### 4. YG別POMSの変化

図3~8にPOMSのYG別各類型の経時的変化を示す。

緊張-不安は、B類が他の分類に比較して高値で経過し、妊娠10ヶ月および産褥1ヶ月において、D類との間に有意な差が認められた。類内の経時的変化に有意な差は認められなかったが、A類は妊娠中他の類に比べ低値を示し、産褥期には比較的高値を示した(図3)。

抑うつ-落ち込みおよび怒り-敵意は、B類が他の分類に比較して高値で経過し、妊娠7・8ヶ月、妊娠10ヶ月および産褥1ヶ月において、D類との間に有意な差が認められた。類内の経時的変化に有意な差は認められなかった。しかし、A類では、他の類がほぼ横ばいに経過するのに対し、妊娠期に比べ産褥期は増加を示し産褥1ヶ月に最高値を示していた(図4、図5)。

活気は、各期における類間および各類内の経時的変化に有意な差は認められなかった。A類を除いて、概ね妊娠中よりも産褥期に高値を示した(図6)。

疲労は、B類が他の類に比較して高値で経過し、妊娠7・8ヶ月および10ヶ月において、D類との間に有意な差が認められた。類内の経時的変化に有意な差は認められなかったが、各類とも妊娠10ヶ月に比べ産褥4日に増加を示し、A類は産褥1ヶ月に更に増加を示した(図7)。

混乱は、B類が他の類に比較して高値で経過したが、有意差は認められなかった。各類内の経時的変化に有意な差は認められなかったが、各類とも妊娠中に比べ産褥期に増加を示した(図8)。

#### 5. 分娩に対する不安と退院後の生活に対する不安

図9は、妊娠37週時の状態不安と分娩時を想像した時に生じた状態不安を表している。全体としては $y = x$ の直線よりも下に分布していた。状態不安は、調査

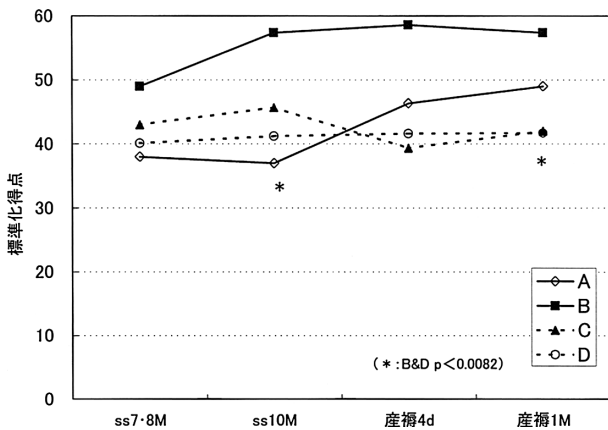


図3 YG別POMS (緊張-不安)

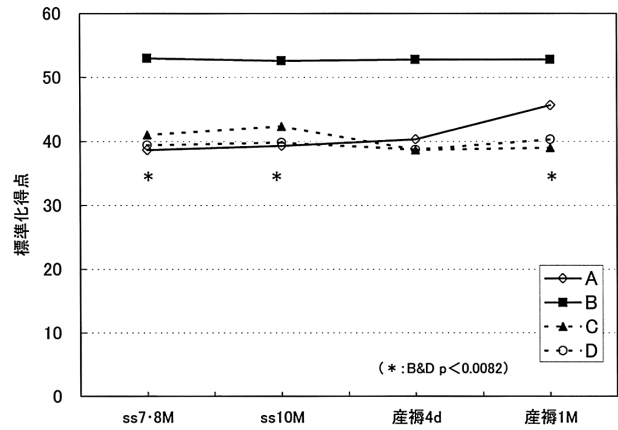


図5 YG別POMS (怒り-敵意)

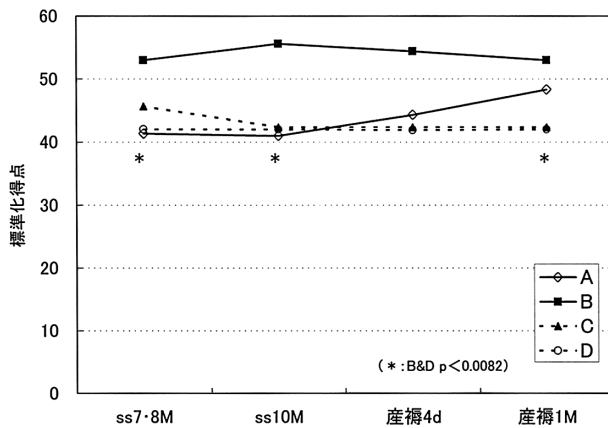


図4 YG別POMS(抑うつ-落ち込み)

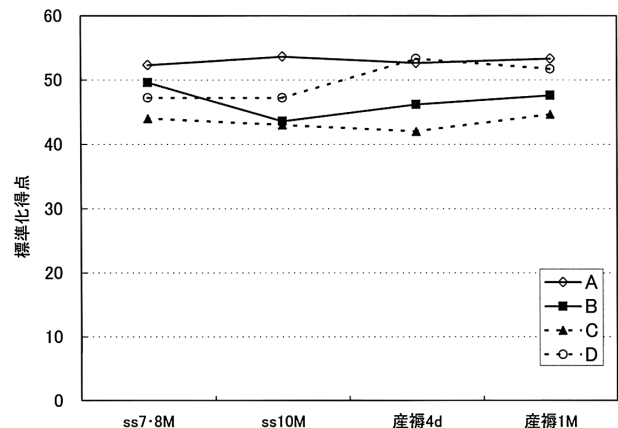


図6 YG別POMS (活気)

時点に感じている不安よりも分娩時のことを想像した時に感じる不安のほうが増加していた。妊娠37週時の状態不安を性格特性で見ると、B類は状態不安が高く、D類は極端に状態不安の強い1名を除けば、比較的状态不安は低かった。しかし、分娩時を想像した時の状態不安との差は、性格特性による目立った特徴はなかった。

図10は、産褥4日の状態不安と退院後の生活を想像した時に生じた状態不安を表している。全体としては  $y = x$  の直線をはさんだ形で分布していた。状態不安は、調査時点に感じている不安と退院後の生活について想像した時の不安との間には、あまり差がなかった。しかし、性格類型で比較してみると調査時点の状態不安よりも退院後の生活を想像した時の状態不安が低い値を示すのは、B類に多かった。

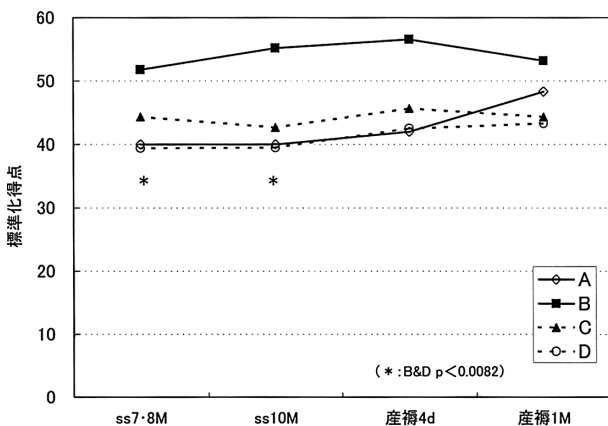


図7 YG別POMS(疲労)

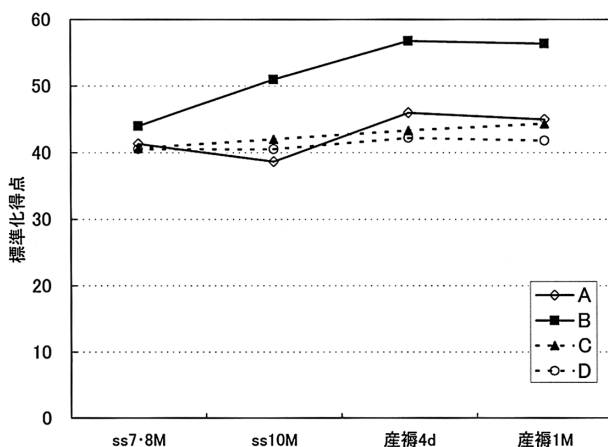


図8 YG別POMS(混乱)

#### IV. 考察

本研究において、YG性格検査による性格類型によって、妊娠・産褥期において不安や気分の違いのあることがわかった。妊産褥婦の心理は、一般に妊娠によって喜びと共に戸惑いや不安も生じ、初期において不安は高い。しかし、妊娠経過の進行に伴い身体が安定してくると不安は減少するが、分娩間近な妊娠末期になってくると分娩に対する緊張感や不安が増強しやすくなる。このことは、川田ら<sup>7)</sup>のSTAIを用いた報

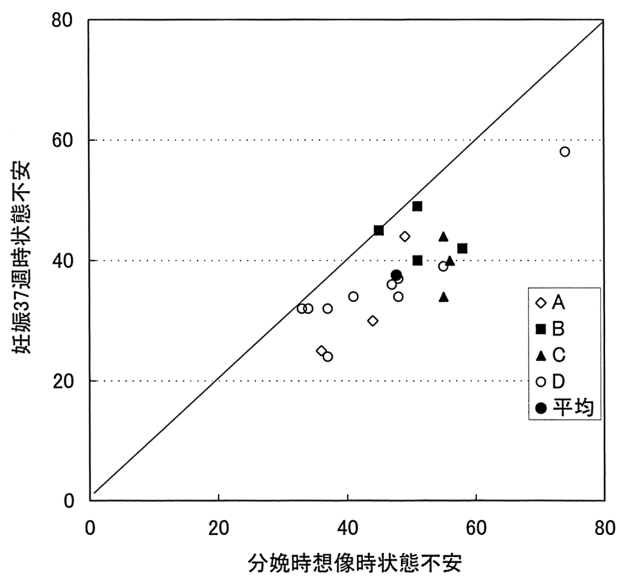


図9 妊娠37週時と分娩時想像時状態不安

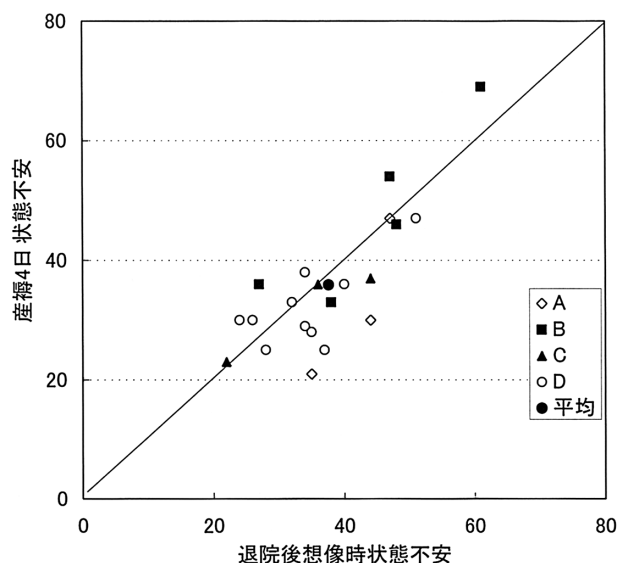


図10 産褥4日と退院後想像時状態不安

告からも理解できる。そして、出産によって、新しい家族の実感・喜びと共に新たな不安や戸惑いが生じてくる。これら一連の過程は、母親になるという前提のもとに引き起こされる心理過程であるが、受け止め方や反応そしてこれらの過程を呈する時間的経過は、妊産婦を取り巻く環境のほかに、妊産婦自身のパーソナリティに委ねられるところが大きい。

岩谷ら<sup>3)</sup>は、1時点における妊婦の不安を花沢の尺度を用いて測定し、YG性格検査による性格特性との関係について、一般不安はB類が最も高く、次いでE、A、C、D類の順であったと報告している。また、喜多<sup>2)</sup>は、妊婦の1時点におけるSTAIの特性不安を測定し、特性不安はE類が最も高く、次いでB、A、C、D類の順であったと報告した。

本研究では測定時期によって多少異なるが、STAIによる特性不安はB類が最も高く、次いでAまたはC類そしてD類となっており、ほぼ同様の結果を得た。しかし、得点においては、A類を除いては報告よりも高い得点を示していた。STAIの特性不安は、ある人の不安になりやすさを示すため、一般に変化しにくいものと捉えられ、川田ら<sup>8)</sup>、大賀ら<sup>9)</sup>も同様の結果を得ている。その点では、特性不安は性格特性を反映すると考える。

しかし、妊娠期や産褥期の特性不安が変化するという報告もある<sup>10,11)</sup>。本研究においては、妊娠期はほとんど変化しなかったが、産褥期において変化を示していた。変化は産褥4日の変化が大きく、概ね産褥1か月では、妊娠期より減少傾向を示していた。従って、合併症や妊娠産褥期の経過異常など特別な状況が生じなければ、いずれの性格特性であってもほぼ同様の変化を示すことが示唆された。また、妊娠期に比べ、産褥期において変化を示していたことから、新たな家族のかかわりは、妊娠期に比べ直接的に不安のなり易さというパーソナルな部分に影響することが示唆された。さらに、性格特性によって、産褥1ヶ月の特性不安の増加割合が異なっていたことから、今後不安のなり易さという特性に影響を及ぼす要因を分析していく必要がある。

STAIの状態不安は、ある時点の不安の強さをあらわしている。川田ら<sup>8)</sup>や岩田ら<sup>10)</sup>は妊娠中期から末期にかけて変化しないかあるいは減少したと報告しているが、本研究では、すべての性格特性で変化しないか

むしろ増加していた。また、岩田<sup>4)</sup>はPOMSの妊娠期における気分変化について、緊張-不安、抑うつ-落込み、怒り-敵意、疲労は、妊娠中期に比べ後期に有意に減少したと報告している。

しかし、本研究ではA、C、D類ではほぼ横ばいを示し、B類では怒り-敵意以外は増加しており、岩田<sup>4)</sup>の報告とは異なっていた。これは、調査が36または37週時点であり、また図9に示すように妊娠37週時点より分娩を想像した時のほうが状態不安は増加していたこと、さらに、川田ら<sup>8)</sup>の分娩直前には急激に状態不安が増加していたとの報告から、分娩に対する思いがより身近に現実的なものとして捉えられるようになり、状態不安やPOMSによる気分に影響したものであると考える。そして、その影響は、性格類型によって違いがあった。

妊娠期から産褥期への変化については、川田ら<sup>8)</sup>はSTAIによる状態不安を、POMSでは片岡ら<sup>12)</sup>、松岡ら<sup>13)</sup>の報告がある。状態不安は分娩直前に増加し産褥5日目は妊娠期と同レベルと報告し<sup>8)</sup>、B類以外は同様の結果を得た。初産婦において、緊張-不安、疲労、活気は妊娠期に比べあまり変化しないか上昇を示し、抑うつ-落込み、怒り-敵意は、減少を示し、産褥1ヶ月にかけては、怒り-敵意は増加を示し、緊張-不安、疲労については減少に転じたとの報告がある<sup>12,13)</sup>。本研究の結果でも同様の傾向が得られているが、緊張-不安は妊娠中から高い値を示したB類を除いては、産褥1ヶ月に増加傾向を示していた。

初産婦の分娩後から産褥1か月の状態不安は、分娩後から産褥1ヶ月にかけて増加するとの報告がある<sup>9,11,14)</sup>。B類以外はそれらの報告とほぼ同じパターンを取っていた。B類は産褥4日に最も高い値を示し、産褥1ヶ月において減少に転じていた。POMSによる気分の変化は、活気を除く他のネガティブな領域において、B類が最も高い値を示した。このことは、他の報告と共に、外向的ではあるが社会不適応性・情緒不安定である不安定積極型のB類の情緒不安定性が、現状の困難さによって不安などネガティブな気分を生じさせやすいことを裏付けていると考えた。また、産褥4日に調査した退院後の生活を想像した時に感じる状態不安は、他の類と比べ産褥4日に感じている状態不安よりも少なく、未来よりも今現在遭遇している事態に感心が強く、未来に対しては楽観視できる傾向にあ

るのではないかと考えた。

従って、医療従事者は、B類つまり積極的だが情緒不安定性を感じる妊産婦に対して、他の性格類型以上に、まず現在おかれている状況に対する不安の分析を行いその解消を行う必要があり、B類以外の類型つまり情緒安定性を感じる妊産婦に対しては、今後起こりうる事象に対する心構えや対策の指導を行って行く必要があると考える。

なお、本研究において、性格類型E類の対象者が含まれていなかったことから、E類の不安や気分の変化については調査できていない。E類は出現頻度が少ないため、今後は症例数を増やし、検討を重ねる必要がある。

## V. まとめ

- 1) 妊産婦の不安や気分の変化は、YG性格検査による性格類型によって違いがあった。
- 2) 特性不安は、B類が最も高く次いでA・C類、D類の順であり、いずれの類型においても、産褥期に比べ妊娠期は高い傾向を示した。
- 3) 性格類型のうち、B類は不安やネガティブな気分を訴えやすい。
- 4) B類は、未来即ち予期的不安よりも現在遭遇している事象に不安を感じやすい傾向にある。

## VI. おわりに

初産婦にとって妊娠出産は、未知の体験であり様々な感情を経験する。体験によって引き起こされる感情は個人のパーソナリティに委ねられるが、外的環境の整え方次第では良い気分・好ましい対処行動をもたらす事ができる。従って、医療者はその人の性格特性、特に情緒の安定性を検討し、関わり方・指導のあり方を検討していかなければならない。今後は、更に対象者数を増やし性格特性による対処行動など検討していく必要がある。

## 謝 辞

周産期いった目まぐるしい時期にもかかわらず、本研究に賛同し、ご協力いただいた妊産婦の皆様、関係機関のスタッフの皆様に深謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 新道幸恵, 和田サヨ子: 母性の心理社会的側面と看護ケア, 第1版, 医学書院, 東京, 50, 1990.
- 2) 喜多淳子: 妊婦の不安傾向と性格特性との関連についての検討 スポーツ経験・習慣および妊婦水泳教室への参加の有無による影響を含めて, 母性衛生, 37, 255-259, 1996.
- 3) 岩谷澄香他: 妊婦の不安と性格の関係, 神戸市立看護大学短期大学部紀要, 18, 1999.
- 4) 岩田銀子: 妊婦の不安の分析(第1報) - POMSの指標を活用して -, 看護総合科学研究会誌, 2, 1: 13-19, 1999.
- 5) 辻岡美延: YG性格検査. 看護研究 17: 124-133, 1984.
- 6) 曾我祥子: STAI (State -Trait Anxiety Inventory) について, 看護研究, 17, 107-116, 1984.
- 7) 横山和仁, 荒記俊一: 日本版 POMS の手引き, 初版, 金子書房, 東京, 1994.
- 8) 川田清弥他: 妊産褥婦の不安について, 周産期医学, 18, 151-156, 1988.
- 9) 大賀明子他: 褥婦の不安変動 - STAI を尺度とした不安水準の分娩1か月までの追跡 -, 日本助産学会誌, 10, 1: 46-55, 1996.
- 10) 岩田銀子他: 妊婦の不安の分析 - 質問紙 STAI, POMS 指標を活用して -, 母性衛生, 41, 2: 201-206, 2000.
- 11) 蛭田由美, 亀井睦子, 西脇美香: 褥婦の出産体験の受け止め方と不安の変化, 母性衛生, 38, 2: 303-311, 1997.
- 12) 片岡千雅子他: 妊娠・分娩・産褥期における婦人の気分・感情状態の経時的変化 - POMS (Profile of Mood States) を用いた質問紙による把握 -, 母性衛生, 41, 1: 85-94, 2000.
- 13) 松岡治子他: マタニティー・ブルーズに関する縦断的研究 - 妊娠期と産褥期との比較による検討 -, 母性衛生, 42, 1: 191-197, 2001.
- 14) 亀井睦子, 増子恵美, 蛭田由美: 産後の母親の不安の変化と要因 (第1報) - STAI の結果から -, 母性衛生, 40, 2: 325-331, 1999.



# Changes in Primiparas' Anxiety and Mood Classified by YG Personality Inventory During the Perinatal Period

TAKE Akemi\*, SUEHARA Kimiyo\*\*

---

## Summary

While the experience of pregnancy and childbirth brings many women feelings of joy, it may also bring anxiety. In particular, the situation of a primipara, who has never experienced the process of pregnancy and childbirth, is complicated; responses to unknown experience depend on a person's character.

The purpose of this study was to classify primipara characteristics by YG Personality Inventory (YG-test), and examine the difference of the changes in scores of anxiety (by STAI) and scores of mood (by POMS) during the perinatal period.

The results were summarized as follows,

1. All 21 subjects were classified in 4 types (A, B, C, D) by the YG-test.
2. Each group classified by the YG-test showed a different process during the perinatal period.
3. Anxiety levels were higher in the pregnancy term than in the puerperium for all types.
4. Type B showed a tendency to have a much higher score of anxiety and negative mood than other types.
5. Type B showed a tendency of having higher anxiety concerning the present situation rather than life after discharge from the hospital.

Type B subjects were found to have a personality characterized by negative feelings and emotional instability in the YG-test. Primiparas classified as Type B showed high scores in their anxiety because of their emotional instability. It is important that medical staff know the difference in feelings of anxiety and mood depending on the primipara's character, and that they create care and methods of guidance in each term of the perinatal period.

**Key words** primipara, YG Personality Inventory, anxiety, mood, perinatal period

---

\*Asahikawa Medical College

\*\*Osaka Prefecture College of Nursing, school of Nursing